みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

日本語・アルタイ諸語における引用表現

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 庄司, 博史 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008396

日本語・アルタイ諸語における引用表現

庄司　博史

一　はじめに

日本語の格助詞トの数多い用法の一つに引用節を導く用法がある。つぎの例は、そのもっとも典型的な用例であるが、トは言ウ、話ス、尋ネルなど伝達を表わす動詞や思ウ、考エルのように知覚・思考を表わす動詞の内容を自然発話にちかい形で示している。

彼は、今日学校が休みだ、と言った。

引用表現の形式は、右に見るように、引用内容がトに導かれた地の文の述語動詞のまえに置かれるのが一般的である。この日本語の引用表現の形式は、いわゆる直接話法、間接話法双方において用いられるが、英語のように、前者は文末にただ後置されるのにたいし、後者は、that, whether, if などの接続詞により導かれ、形式的にも区別されるのとは異なっている。また一方、日本語の引用表現は先の基本的な形式のほかに、引用部が助詞トとともに、地の文から分離し、述語動詞に後置される形式などいくつかのバリアントが存在する。これら種々の表現形式がたんに方言や文体のみの違いによるものでないことは、同一のテキストにこれらバリアントが存在することから推測できる。

一方、このような引用表現の特徴は、日本語のみでなく、モンゴル語、チュルク語、ツングース語などのいわゆるアルタイ諸語や朝鮮語にも、非常に類似した形で現われる。

この論文では、これら諸語にみられる多様な引用表現形式を類型的に分類し、総合的に検討することにより、日本語の助詞トと諸語においてそれに相当する要素の役割について論ずる。

そして、それら諸形式の出現の過程について、言語の基本語順からくる統辞的拘束性と文章理解上の心理的メカニズムから説明を加えようとするものである。(注1)

二　引用と助詞「ト」について

まず、引用についての一般的な概念として『日本語学大辞典』〔五六〕ではつぎのように述べられている。「『言う』『話す』など引用動詞を述語とする文は、そのなかに別の発話の場で成立する文を含むことができる。この埋めこまれた文を引用文、引用動詞を述語とする文を地の文、全体を引用構造と名づけておく。引用文としては、発話をそのまま埋めこむ直接引用文とそれをいちど地の文の発話に還元して埋めこむ間接引用文とがある」。

本論でも同様の用語を用いるが、地の文に埋めこまれるのはかならずしも文とは限らず文として不完全なものや語や句が現われることもあるため〔神谷　一九八三：六七〕、「引用文」のかわりに「引用部」と呼ぶことにする。

さきにもふれたとおり、日本語では、引用部は格助詞トによって導かれるが、この引用部にはどういうものがくることができるかについて考察することにする。まずトの導く内容に関して、国立国語研究所報告3『現代語の助詞・助動詞』〔一九六一：九九―一一〇〕によれば、格助詞としてのトは大別してつぎの四つを標示する。

a　相手・共同者
b　比較の基準としての対象者
c　転化する帰着点
d　動作・作用・状態の内容を示す

このうちdはさらにつぎの五つに分類されるが、ここであつかう引用表現に関係するのはとくにイ、ロ、ハである。

イ　つぎに来る動作・作用（観察・思考・意向・決心・命名・言表などの精神作用）の内容を指定する
ロ　引用語句であることを示す
ハ　つぎの動作を起こす心理的前提・動機

ニ　動作のしかた・おこなわれ方を示す

ホ　副詞語尾

つぎに、トの導く引用部の形態についてみると、三上は「～ト言ウ」のような表現に用いられる助詞（三上は準詞と呼ぶ）トが導くことができるものとして、単語と陳述の二つがあるとしている［三上　一九七二：三四一］。前者はトを名ヅケル、称スル、呼ブなどが受ける場合で、三上は引用表現としての話法には含めない。

この現象を光の回折と名づける。

また、つぎのような場合も、たとえ文としての形態は整っていても、終止形が中立不定として使われているという理由で、「単語と同格のもの」としてあつかっている。

この現象を光が回折するという。

三上はここで、「単語と同格のもの」を「陳述」と対立するものとしてあつかっているが、この二つの概念により引用表現であるか否かを判定するのはむずかしい。つぎの例においてトを含む引用部は称スルにより受けられてはいても、引用部の述語は断定を含み中立不定ではない。

われこそが勝利者だと称する男がやって来た。

したがって、トを名ヅケル、称スル、呼ブなどの動詞が受ける場合でも、引用部は、単語から完全な文まで、幅ひろく含みうるといえよう。

一方、「単語」と対立するものとして、三上のあげた「陳述」と呼ぶものにも、形態上は単語や句あるいは感動詞だけのように、文としては不完全なものも含まれる。

彼は、「やまだ」と僕の名を叫んだ。

僕は、行くならアメリカと考えている。

このように、三上の区別する「単語」と「陳述」は、形態上かならずしも対立する概念ではないといえよう。むしろ、ここでは機能のちがいとみて三上のいう「単語」にあたる場合は、「〜ヲ〜ト言ウ、考エル」のような補格的用法として、引用表現から区別・分離できよう。それでは引用表現のもつ陳述性とは、何であろうか。あるいは、トの導く引用部の特徴とはなにであろうか。さきにも述べたように、これは単語、句、節、文などのように形態のちがいにかならずしも左右されるものではない。ここで引用部を導くトの機能をきわだたせるため引用表現とほぼおなじ内容をもつ表現を対比してみる。

彼女は、彼の正しさを　信じています。

彼が正しいのを

彼が正しいことを

彼女は、彼は正しいに違いない　と信じています。

彼は正しい

彼は正しいだろう

こうしてみると、中心的な伝達内容「彼は正しい」という点に関しては、最初のグループは、それ以下のトの導く引用表現とほぼおなじとみることができる。しかし一方では、三つの引用表現それぞれが表わしている発話者の(発話の内容にたいする)心理的態度、あるいはモダリティの差異を区別しえないことも明らかである。つまり、最初のグループの「彼の正しさ」には種々のモダリティはまったく含まれ得ない。したがって、引用表現は話者の内容にたいする心理的態度がこめられているという点でそれだけ実際の発話にちかいといえる。また、つぎに比較する二文のうち、前者は引用表現のかわりに用言の連体形とコトを用いている、引用部に相当する部分が事実であるという前提が、含められている［NAKAU　1972：122, KUNO　1973：124］。

あの貧乏学生は、警察に、自分が大金を盗まれたこと　を訴えた。
あの貧乏学生は、警察に、自分が大金を盗まれた　と訴えた。

しかし、後者の引用表現においては、そのような前提は存在しない。以上のことから、助詞トは、実際の発話にちかい表現を地の文には影響されずに、地の文に埋めこむ機能があるといえよう。

三　発話機能と引用形式からみた直接引用と間接引用

引用表現すべてが、実際の発話そのままを含んでいるわけではない。すでにモダリティの観点からすこし触れたが、ここで直接引用と間接引用の区別と密接な関係をもつと思える「発話」について検討する。

Halliday は、発話にはつぎの三種の機能が含まれるとしている［HALLIDAY　1970：143］。第一の機能は観念機能(ideational function) で話者の実世界および意識内の世界の体験について述べることにある。いわゆる「内容」あるいは「命題」の表現である。第二には、対人関係機能 (interpersonal function) があり、一般にいわれる表現意図、モード、モダリティに相当する。これは話者の心理的態度を示すと同時に、話者の聞き手への働きかけを含む。第三はテキスト機能 (textual function) で、これにより話者は、連続する談話のなかに状況にあった形に文を組みたて、文と文を連結させる。このうち観念機能は、いうまでもなく言語表現の論理的な核になるもので、文を構成する語とその配列によって示される。

対人関係機能のになうモダリティは、日本語では文末の終助詞や助動詞、文副詞、間投詞、語調、アクセントなど多くの要素が関与している［入谷　一九八一：四四―四九］。たとえば、話者の発話内容にたいする心理状態を表わす「(だろ) う」(推定)、「そうだ」(伝聞) は助動詞であるが、文副詞「たぶん」や「聞くところによれば」などでも、ほ

ぼ同様のことを表現できる。

彼は元気だろう。

たぶん彼は元気だ。

また、相手への働きかけでは、終助詞「ね」、「よ」や間投詞などによっても表現される。

ずいぶん大きなお子さまですね。

もしもし、山田さんではありませんか。

一般に、発話はおもに観念機能と対人関係機能以上の二つの機能から論じられることが多く、後者は、話者の主観的な表現部分として、前者の命題をつつみこみ、具体的な発話の文を構成する［上野　一九八二：一二二］とみなされることが多い。日本語文法学では、この意味でのモダリティの機能のさらに詳しい分析がおこなわれている（諸説の紹介については［南　一九七六：二〇―二五］が簡潔にまとめている）。

しかし、実際の発話が伝達機能を果たすためには、テキスト機能の占める役割も大きい。すなわち発話が談話の流れのなかで筋が通ったものになるためには欠くことのできぬ部分である。これは、おもに発話の出発点となる主題を伝達内容から定め選びだす主題構造と、伝達内容のうちの既知情報と未知情報を区別する情報構造に関係している［天野　一九八三：一二五］。日本語では、これらは格助詞や語順によって標示されることが多い。

以上のことから、発話のなかには、論理的命題に加えて種々の関係がおりこまれていることがわかるが、直接引用は、実際の発話にあったこれらすべての関係を、保持しているものと考えることができる。それにたいし間接引用の場合は「直接引用文の内容を地の文の話し手の立場に翻訳した文」であり、これにより「直接引用文の発話の場は一次元下げられ、地の文の場に同化する」［奥津　一九六八：四］。この過程で、もとの発話と地の文の発話の場がかわることによって、まっさきに影響を受けるのが境遇性のある語で人称代名詞や指示代名詞のようなダイクティックな要

素、時間副詞（キノウ、イマ等）および方向・授与を表わす動詞（行ク：来ル、モラウ：アゲル）が転換させられる。そしてこれに加え、以下の操作が必要になる。第一に、もとの発話が含んでいた表現意図（対人関係機能）は、地の文の発話の立場から表現されることになる。この段階で表現意図は別の手段により表現されたり、適当に弱められたり、あるいは削除されたりすることもある。[注2] たとえばつぎの例のうち後者のように、ゼ、ゾ、ワ、ヨなど終助詞によるモダリティは間接話法には一般に許されない。

彼は私に「君をもう信じないよ」と言った。

＊彼は私に私をもう信じないよと言った。

第二に間接引用は発話を元の談話や文脈の流れのなかからある程度切り離してしまう。したがって、それらに依存し、またそれらを支えていたテキスト機能の要素の一部は削除され、表現がいく分、無標的で中立的な性格をおびることは免れない。つぎの例のように直接引用はたんに人称代名詞をかえるだけでは文法的な間接引用としては成立しない。つまり語順の変化により表現されていた焦点（focus）はそのままでは間接引用には移されない。

先生は「何をしていたんだ、おまえは」と言った。

＊先生は、何をしたんだ、わたしは、と言った。

このように、直接引用にくらべ間接引用は発話のもつ三つの機能のうち、もっとも中心的な伝達機能以外の二つは弱められて表現されるということになり、それだけ実際の発話から遠ざかることになる。

現在まで、このような直接引用と間接引用のちがい、あるいは直接引用表現を間接引用表現に転換するさいの種々の規則を提示する試みがなされてきている[奥津　一九六八、三上　一九七二：三三四、遠藤　一九八二、鎌田　一九八三、NAKAU　1972：88-91][注3]。

しかし実際の言語使用では、引用部が直接引用と間接引用のいずれかはっきり区別されているとは限らない。つま

り、もとの発話の一部だけが直接引用として現われ、のこりは間接化されている場合や、間接化する場合でもいくつかの中間的段階があり［遠藤　一九八二］、かならずしも直接引用と間接引用は背反するものではないとの考えがえられる。したがって、ある引用部が直接引用か間接引用か、したがってダイクティックな要素が実際は何を指しているのかなども、地の文の置かれた全体的脈絡のなかで明らかになることもありうる。

間接引用は、他人の発話を地の文の話者が自分の立場から言いかえたものであるとするなら、そのような表現の存在する理論的根拠は十分あるようにおもえる。しかしみてきたように、日本語において、直接引用から間接引用への変換は、もっぱら引用部のみにかかわることで、引用部を助詞トで受けてとり囲む文の構造にはほとんど影響がないことに注目される。つまり、助詞トはすべての機能を維持したままの発話も、それが対人関係機能とテキスト機能において弱められている場合も、同様に引用部として受ける役割を与えられているといえる。

四　日本語における引用表現の諸形式

直接引用と間接引用が形式的に区別されないのとは対照的に引用表現の形式は多様であるが、それらを一括して、類型的に分類・分析しようとした試みは、少ないように思える。筆者の知るかぎりでは、神谷［一九八三］と三上［一九六三］がある。前者は、『源氏物語』にいたるまでの仮名物語に見られる引用形式を、引用直前の形態と引用部が連続する形態から作品ごとに考察し、それらの推移をたどろうとした。スコープが平安時代までの物語という、比較的短い期間の発展を追うため、言語的発達というより作家の作風や流行にかかわる、むしろ文体史的性格が強いように感じられるが、扱われている引用形式の多くは今日も見られるもので、本稿において形式を分類するさい参考になった。三上は現代日本語の直接話法の形式として、正置・反復・例置・セリフ止めの四つをあげている［三上　一九六三

：一三四]。

正置　彼は、「鯨は魚だ。」と言った。

反復　彼は言った、「鯨は魚だ。」と彼は言った。

例置（倒置の誤りか？）　彼は言った、「鯨は魚だ。」と。

セリフ止め　彼は言った、「鯨は魚だ。」

しかし、同書において三上は「……と思う」という表現や直接引用と間接引用の違いなどについて独創的な説を展開していながら、残念なことに、ここにあげた引用形式に関してはほとんど述べていない。本稿ではおもに地の文と引用部の関係に注目して引用形式を分類したが、つぎの二点を基準とした。

イ　引用部と引用部を導く助詞トがそれらを受ける地の文の動詞（とりあえず引用動詞と呼ぶ）の前後いずれに現われるか。

ロ　引用部の前に地の文の動詞が現われる場合、それが言いきりの形をとるかどうか。すなわち、そこで当該動詞あるいは、それに接続する助動詞が終止形あるいは命令形などで、文がそこで形のうえで完結するかどうか。ただし、引用部のあとに引用動詞が現われる場合は、たとえそれが言いきりの形をとらず、文があとに続いていても、引用表現としては完結しているとみなすことにする。(注4)

これらにしたがい、以下に日本語の引用表現形式をタイプ分類するが、形式化のため記号で標示する。Q―引用部、V―引用動詞、f―終止形、c―連用形、p―連体形。タイプごとに原則として、現代語と古典語のそれぞれ一例を示す。

（1）　Q―ト　V―f。

例　彼は、「今日は学校は休みだ」と言った。

返りける人きたれりと言ひしいかば、……（『万葉集』三七七二）

これは、もっとも一般的にみられる引用形式で、三上のいう正置にあたる。引用部はトとともに引用動詞の前に置かれる。引用動詞[注5]として用いられるものには、まずもっとも基本的に伝達を表わすものとして、言ウがある。また、言ウのかわりに、具体的に伝達形態をしめす動詞として、話ス、語ル、教エル、問ウ、答エル、書クなどが用いられる場合もある。さらに、これらが言ウといっしょに現われる場合があるが、そのさい、言ウは言ッテの形をとり、つづく伝達動詞に係ることが多い。

彼は、「僕は、知らない」と言って答えた。

現代口語に現われるッテは、この言ッテの短縮形と考えられるが、機能の面では、トとほとんど同じとみなせるであろう（古典語にみられるトテについては、つぎのタイプで扱う）。

彼は、「学校は休みだ」って言っていたよ。

このタイプと同じ形式の表現に引用部を受ける引用動詞として伝達動詞のかわりに思ウ、考エルなど思考活動や、知ル、感ジル、聞クなど感覚・知覚活動を示す動詞がくる場合がある。

明日はきっと雨だ、と思う。

帰りける人来れりと言ひしかばほとほと死にき君かと思ひて（『万葉集』三七七二）

いわゆる心話がこれにあたる。引用動詞により、引用部は、実際の発話にちかい直接話法の形態をとれるものとそうでないものがある。思ウは前者にあたるが、知ルはそうでない。知ルは引用内容が真実であるという前提を含み、モダリックな要素を許さないからであろう。

優勝したのは、瀬古だった、と知った時は驚いた。

＊絶対瀬古が優勝すると知っている。

（2）　Q―ト（V―c）……

さきの第一タイプの派生と考えられるタイプで、引用部を受けるはずの伝達・思考・知覚などを示す本来の引用動詞がなく（省かれ）、その代りに、引用部を発話として伴う動詞（……の部分）が見かけ上、引用部を受ける形になる。まず、言ウ、思ウが省かれていると考えられる例をあげる。(注6)

彼は、こんにちは、と入ってきた。

をとめらがをとめさび周とから玉をたもとにまかし遊比家武……（『万葉集』五八〇四）

これが潜在的に本来の伝達動詞を含んでいることは、ほとんどの場合において言ッテや思ッテ（V―c）を引用部と当該動詞の間に挿入できることからも推測できる。(注7)

彼はこんにちは、と言って入ってきた。

このタイプがもっともよく用いられるのは、引用部が、後続の行為の目的・理由を示す場合である。この場合は引用部の述語に意志・目的を示す要素が含まれることが多い。

今度こそ合格するぞ、と勉強した。

春の野に泣くやうぐひすなつけむとわが家のそのに梅が花さく（『万葉集』五八三七）

現代語では、ト言ッテの短縮形のッテが同じ機能で用いられることがある。古典語では、トと並び現代語のッテに当るものとして、トテが、「目的や条件や原因、理由、時間、関係などやや論理的関係を帯びて下に結びつける用法」として指摘されている［神谷　一九八三：六七］。

合格するぞ、って勉強した。

隣の国へ行くとていみじう恨みければ……（『伊勢物語』）

（3）V—f、Q—ト

引用部と引用助詞トは、言いきりの形の引用動詞V—fの後に置かれている。引用動詞は引用部の導入の役を果たしているといえる。

のろのおふくろさんはきっと、こうボヤいていたのだろう「……」と。（『子どもの館』一九八一・七：五八）

使者答フ、此レ　魔王ノ在ス所也ト（『今昔物語集』）

これは三上の言う例置（倒置の誤りか？）に当たる。日本語の、述語動詞が文末にくる基本語順からみれば、このタイプは倒置である。引用部の前に来る引用動詞にはコウ、コノヨウニなど、後の引用部を照応する副詞的前承詞が用いられる場合がある。古典語では、この形式は、右の例のように、漢文訓読文の影響を強く受けた和漢混淆文に多いといわれる［大坪　一九八三：二九］が、種々の連用修飾語が述語に後置される倒置は和文においても見られる。

（4）①V—f、Q—ト　V—f。

②V—p、Q—ト　V—f。

①は、さきの第一と第三のタイプの混交形のようであるが、引用部の前後に言いきりの形をとる引用動詞がくる。三上の言う反復形式に当たる。

中宮の御返りまず聞え給ふ。「……」と聞え給ふ。（『落窪物語』）

②は引用部に先行する引用動詞が言いきりの形をとらず、現代語では言ウニハ、言ウコトニハ、古典語では、言フコトハのように名詞化し、主題としてとり出したような形式やイハク、イヒケル、イフヤウ、イフ、問フのように連

体形をとる場合がある（前者は連体形ではないが、名詞的性格を持つという点においてここではとくに区別しない）。

かぐや姫のいわく「……」といえば、（『竹取物語』）

ほいからひきがゆーことにゃー「……」ゆーてくうたげないのー（広島方言）（『言語生活』　一九七四・四）

ここで注目すべき点は、引用部の前にも予告語として引用動詞が現われることで、国語学では双括引用と呼ばれ、第一の単括引用と区別されている［国語学大辞典：一三九］。双括引用形式に予告語としてイハクが現われることは、漢文訓読文の影響とされるが、すでに上代の文献にも見られることも指摘されている［神谷　一九八三：七〇、岡村　一九七七：二四四］。

②の変形と思われるものに引用部Qの後が完全に欠落している形式がある。これは、つぎに述べるタイプと形式上類似している。後者が、構文上独立した二文から成り立っているのに対し、ここでは、導入部としての引用部に先行する部分は、構文上引用部とともに上位の文の一部である。全体として、構文上不完全さを伴うのは、②のタイプの一部が省かれているためであろう。

おじょさんのえわれーましたわ、「……」。（島根方言）（『言語生活』　一九七四・七）

（5）　V－f、Q

石麻呂に吾物申す　夏やせに良しというものぞとり食せ。（『万葉集』三八五三）

このタイプでは、地の文と引用部が形態上独立している。地の文の最後の引用動詞は、言いきる形をとり、統辞上は完結して、後の引用部とは分離しているといえる。（3）のタイプとは異なり、引用部の後には、助詞トは来ない。実際の発話では、地の文の後にポーズが置かれ、書かれた場合には、終止符が置かれるのが一般的であろう。三上の言うセリフ止めである。

五　アルタイ諸語における引用表現の諸形式

ここでいうアルタイ諸語とは、モンゴル系、チュルク系、ツングース系の言語を指している。しかし、この用語は、ここでは単に統辞類型上非常に類似した特徴を有し、地域的にも比較的まとまった言語群であるという意味で便宜上の用語として用いており、系統上の関係は前提とはしていない。朝鮮語を考察の対象としたのも、統辞類型上似ているという理由に拠っている。これら諸語の統辞類型的共通点は、これらがいわゆる動詞文末語（verb final language）に属すことである。一般に動詞文末語の基本語順はＳＯＶで表わされ、目的語その他補語は動詞に先行することを含意するが、そのほかにも形容詞―名詞、名詞―後置詞、関係節―名詞、動詞―助動詞などの語順も共起することが多い[注8]［Greenberg　1963］。この動詞文末語に普遍的にみられる特徴は、ここで扱う諸言語においても共通している。

日本語と同様にアルタイ諸語や朝鮮語においても、直接引用と間接引用の区別は表現形式上明確ではない。Poppeはモンゴル語について［Poppe　1974：184］、Ramstedtは朝鮮語について［Ramstedt　1939：336］、そのように述べている。他の言語についても直接引用しか存在しないとされている場合があるが、実際には直接・間接引用の概念的区別があいまいなことによると考えられる。Kisslingはトルコ語には間接引用はないとし、それに相当するものとして、動詞が―miş―の語尾を取る伝聞活用をあげている[注9]［Kissling　1960：218］。一方、Gabainによれば古代チュルク語の間接引用は引用部の主語のみが対格で標示され、述語動詞は直接引用と同じ形式、つまり、日本語のトに当たる、-tipにより受けられるとされる［Gabain　1974：192］。

ol tünlïγïγ ”yoqlunmaqsïz ärür” tip bilgülük ol.「この人生は否定できぬものだと知らねばならない」。tünlïγ-ïγの-ïrは対格の語尾である。同様の表現はモンゴル語や満洲語にも見られ、胡［胡　一九七九：二七〇］も間接引用とみ

なしているが、主語の省略された場合には、内容に拠らざるを得ないことを認めている。ここにあげたような形式は、間接引用とみなすよりむしろ、引用部の一部としての主語が引用部からとり出され、引用動詞の目的語として対格をとったもの、すなわち引用部の一部が名詞化されたものと考えたほうが適切であろう。次は、deв（古代チュルク語の tip に当たる）を用いた直接引用と同様の形式をもつ間接引用として、Gabain［Gabain　1945：154］が挙げたウズベク語の例であるが、引用部の主語 abamlar は主格で対格ではない。

məmləktətdə ikki χɔl tyrkymdə bir-birgə dusman adamlar pəjdə bolqan deв esitər edik.「国では二つの群れで互いに敵対している男たちが現われたということを我々は聞いた」。

また Benzing もツングース諸語について、印欧語の間接引用のかわりにただ、直接引用のみが存在すると述べているが［Benzing　1955：245］、次の満洲語の文は、間接引用とみなされる。

mini jafan buhe sargan jui be durime gaimbi sehegge be tašan sembio「我が結納与えた女子を奪い取るといったことを偽というか」［満文老太祖　I：二二］

ここでも引用部の本来の話者は、聞き手であり、mini「我が」は地の文の話者が自分のことを指して言ったことばである。以上のことから、アルタイ諸語においても日本語と同様に、形式としては間接引用は直接引用と基本的に同一であるといえる。

さて、以下にこれら諸語の引用表現の形式を分類し、例をあげる。分類の規準は日本語の場合に準ずる。形式標示に用いる記号の内 f は動詞が定形（finite form）を示すが、不定形（nonfinite form）でも文を終止する機能のあるものは含む。p は動詞不定形の分詞（participle）で名詞や形容詞の機能をもつもの、c は副動詞（converb あるいは gerund）で副詞の機能をもつものを指す。V は日本語の例にもあったように引用部を受ける動詞すなわち引用動詞を指すが、v はこれら諸語で伝達動詞としてもっとも基本的な言ウに当たるものを指す。例示する諸語の文例は、朝鮮語（朝）の

外に、原則として、チュルク系からオスマン語（オ）、モンゴル系からハルハ語（ハ）、ツングース系から満洲語（満）により示すが、場合によっては同系の他の言語をとる。

（1）　①　Q－v－c、　V－f　（Q－v－f）

（オ）'partimize yazıl!' di-ye bağırdı.「我々の党に入れと（彼は）叫んだ」[KISSLING　1960：190]。

（ハ）tsetseg boroo orsoŋ ge-dʒ xeleŋ.「ツェツェグは雨がふったと言った」[VIETZE　1969：105]。

（朝）busan'issnuun mun'in'n nugu nugu' yo ha-go juŋguga mur'əssda.「プサンにいる文人は誰と誰です？　と重九が尋ねた」[石原・青山　一九六三：二二二]。

（満）i ini eme be yasa baime genehe se-me jabuhai.「彼の母は目を探しに行ったと言った」[HAENJSCH　1961：63]。

日本語の（1）のタイプに相当する、もっとも一般的な形式である。引用部は文末の引用動詞の前に置かれている。占める位置および機能の面で日本語のトに当たるものは、いずれの言語も当該言語の言ウに当たる動詞（もっとも基本的な伝達動詞であるという意味で基本伝達動詞と呼ぶことにする）の副動詞形（下線部）を用いている。ここに用いられている副動詞語尾は、当該言語において、一般に同じ主語をとる他の先行あるいは付随する行為を表わすが、日本語では、～シテ、～シナガラと訳せる場合が多い。(注10)

しかし引用表現に用いられている場合は、～ト言ッテと訳すより単に～トとするほうが自然で、実際、引用動詞として知覚・思考動詞などが現われる場合は、日本語と同様にほとんど「言う」の意味はない[KISSLING　1960：190, GRØNBECH-KRÜGER　1955：32]。まず知覚動詞の例をあげる。

（オ）Bugün balık çok çıktı diye işittim.「わたしは今日は魚がたくさん出たと聞いた」。

（モンゴル・中世文語）tayyiciud aqa deü cinu naytamu' keen 'medeju「なんじのタイチウド兄弟がねたんでいると知りながら」[STREET　1957：46]。

（満）tereci omolo tiyan ki han tehe seme donjiha…「それから孫天啓皇帝座したと聞いた」[満文老太祖　I：二二五]。

またつぎのように思考動詞が引用部を受ける場合にも「言う」の副動詞形が用いられる。

（オ）kendikendine："……" diye düşünüp「自分で『……』と思って」[RÜHL　1970：168]。

（ハ）……xoniŋ süreg xariuldʒ yavbal deer baix gedʒ sanasnygaa…「ひつじの群を見張っているほうがましだと思ったことを……」[VIETZE　1969：133]。

（朝）……sunuu 'əbsda-go saiŋgaghaissda.「……ことはできないと思った」[石原・青山　一九六三：二六〇]。

（満）nikan gurun……minbe waki seme guniha「明国は……我を殺したいと思った……」[満文老太祖　I：二二四]。

引用部を受ける副動詞形は、「言う」という意味が薄れたことに加え、本来の機能からはずれてトと同じ機能を得て形態的にも固定されたためか、短縮あるいは変化を起こしたものがある。朝鮮語の go は ha-go の短縮したものである[菅野　一九八二：二六八]。また、ツングース系のナーナイ語でも、基本伝達動詞の副動詞形 umi, umari (pl.) は -m に短縮して現われる[MENGES　1968a：245]。

以上のようにこれら諸語において引用部と引用動詞のあいだには、基本伝達動詞の副動詞形がかならず現われる。機能上、日本語のトと同じく引用部に後置され、それを標示するという意味で、これらも引用の助詞とみなすことができる。

ところで、注目すべきことに基本伝達動詞が引用動詞として用いられる場合には一般にそれだけが単独で引用部を

受ける（Q－v－f）ことができる。[Kissling　1960：190, Poppe　1974：184, 菅野　一九八二：二六八]。

②Q－v－f

（オ）odandan çɯk! dedi.「部屋から出て行けと言った」。

（ハ）soniŋ yum sonsox n' tʃinii dalaŋ doloоŋ ügnees tʃuxal baina gev.「おもしろいことを聞くほうがおまえの七十七の言葉より大切だと言った」[Vietze　1969：161]。

（朝）「……cumu'iso」haissda.「お休みやすと言った」[石原・青山　一九六三：一九四]。

（満）ainu ubade isijiha ni sehe.「どうしてここへ来たのだろうなと言った」[山本　一九五五：四九八]。

（2）Q－v－c……

日本語の（2）に相当する形式である。日本語では、助詞トは形の上では引用動詞だけではなく他の動詞にも直接引用部を介したが、潜在的には「～言って」の意味を含むことは先に触れた。それに対して、これらの言語では基本伝達動詞の副詞形が用いられており、文字どおり「～言って」の意味が保たれているようである。

（オ）niçin gelmedin? diye kalktı.「なぜ来なかったと言って去った」[Kissling　1960：192]。

（ハ）'……'gedʒ gertee xürt irdʒ.「……と言って天幕へ戻った」[Ramstedt　1973：252]。

（朝）"ohyəŋ 'oincəi car doaiss'ə" hago……hiccug 'os'əssda……「『呉兄もうまくいきました』と……にっこり笑った」[石原・青山　一九六三：二三〇]。

（満）mini gaiha babe si ainu nungnembi seme gemu waha.「我が取った処を汝何故侵すと皆殺した」[満文老太祖Ⅰ：二九三]。

またこの形式は、後に続く行為の目的、原因、理由を表わす場合にも用いられる点で日本語と共通している。引用

部は実際の発話よりむしろ心話であり、ここに現われる副動詞は「〜思って」にちかい。目的を示す場合には、引用部に願望・意志などを示す副詞、助詞や活用語尾を取ることが多い。

（オ）ɪɡɪk görülmesin diye pencereyi kapadı.「光が見えないようにと窓を閉めた」[Kissling　1960：191]。

（ハ）bi yum xudaldadʒ avax gedʒ xot ruu yavsaŋ.「何かを買おうと町へ行った」[Vietze　1969：105]。

（朝）bada'əi bbacici 'anŋ'uryə-go mom'ur duiro bbaiddai'əssda.「海に落ちまいと体をうしろへ反らせた」[石原・青山　一九六三：一八四]。

（満）coohai niyalma be kafi waki seme afara de「兵の者をかこんで殺そうと攻める時」[満文老太祖　I：一七八]。

（3）V—f、Q—v—c。

（古代チュルク）äšidmisi bar ärdi ; bo nigranti……körüči ol tip「彼は聞いた、ニグランティは予言者だと」[Gabain 1974：193]。

（ハ）xatadaas asuudʒee：……gedʒ「馬番にたずねた……と」[Ramstedt　1973：35]。

日本語の(3)に当たる。この形式は引用部が、それを受ける基本伝達動詞の副動詞形とともに引用動詞に後置されている。引用部の前に来る引用動詞は文を終止する形をとっている（二重下線）。このタイプも日本語と同様に基本語順からみれば、倒置である。

（4）①V—f、Q—v—f。（V—f、Q—v—c　V—f）

（古代チュルク）inča tip tidi：……tidi.「こう言った。……と言った」[Gabain　1974：293]。

（ハ）……xeldʒee……gedʒ xeldʒee.「言った。……と言った」［RAMSTEDT　1973：252］。

②V―c、Q―v―f（V―p、Q―v―f）（V―c、Q―v―c、V―f）

（モンゴル―文語）aqanarturiyan ögülerün'……'kemen ögülegsendür「兄達に言って……と言った」［GRØNBECH-KRÜGER　1955：48］。

（朝）nai 'ahairuur muddai, nəi 'ədi sananya, ha'yəssda.「私が子供に尋ねたことには、おまえはどこに住んでいるか、と言った」［RAMSTEDT　1939：99］。

（満）fujisa han de hendume……seme henduhe「夫人達ハンに言うには……と言った」［満文老太祖　I：二五七］

①、②とも引用動詞が引用部の前後に現われるという点で共通している。後にくる引用動詞は文を終止する形をとる。また、文語として表現が定形化されたものには、引用部の後にも同じ引用動詞Vがくり返される場合もあるようである。異なる点は、①では引用部に先行する引用動詞が終止形であるのに対し、②では、副動詞形あるいはその他の不定形をとる。それぞれのタイプにいくつかのバリアントがあるが、一般に引用部の前にくるのは引用動詞である。

①はチュルク系、モンゴル系にみられるタイプである。とくに古代トルコ語では、例にあるように inča tip tidi Q -tidi という形に固定化されている。

②はチュルク系以外にはよく見られるタイプである。ここには、特別な副動詞が用いられることがあり、モンゴル語文語に用いられる副動詞 -run／-rün[注11] は、converbum praeparativum［POPPE　1974：183］といわれるもので、「～がいうには、～がいったことには」と訳すことができよう。朝鮮語の -dai の場合は、converbum citationis［RAMSTEDT　1939：99］と呼ばれるものである。満洲語には、引用部を受ける基本伝達動詞の副動詞を作る同じ語尾 -me が現われる。また、つぎの例では引用部の前の引用動詞は完全に名詞化されており、ちょうど日本語のタイプ（4）②に見られる「～がいうには、～がいったことには」と同じ構造を持つと考えられる。

（ハ）dzurgiig üdzedʒ baigaad xelseŋ n'……gev.「写真を見てから言うには……と言った」[VIETZE　1969：163]。

（朝）……marhagiruur,……（hago）ha'yəssda, が……「言うには……と言った」[河野　一九五五：四一八]。

（満）genggiyenhan……hendurengge,……seme henduhe.「ゲンギイェンハンの……言うことには……と言った」[満文老太祖　I：五八―五九]。

この形式の変形と思われるものに、引用部の後が完全に欠落しているものがある。これに相当する形式も日本語において見られた。

（朝）'i'yəi jəija'əigəi nirasyadai,……「そこで彼らに言ったことに、……」[RAMSTEDT　1939：197]。

（満）juwe niyalma sasa ilifi hendume, aga be geneki.「両人が一斉に立って申しますには、兄貴あっしらは出かけましょう」[山本　一九五五：五〇三]。

（5）V―f、Q

（オ）yolda birisi sormuş ; Hocam, nereye ?「道で一人の者が尋ねた。だんな、どちらへ？」[RÜHL　1970：154]。

（ハ）xaaŋ xeldʒee : "dʒaa, xataŋ atsarvuu ?"「ハーンが言った。よろしい、夫人を連れてまいったか」[RAMSTEDT 1973：279]。

構文上引用部を導入する部分は引用動詞の終止形で終わり、引用部とは独立している。一方引用部には、引用の助詞としての基本引用動詞の副動詞形が続かない点において、（3）のタイプと異なっている。

六　引用表現諸形式についての考察

以上、日本語とアルタイ諸語、朝鮮語における引用表現の形式を見てきたが、機能と同様に形式においても非常に類似していることが明らかになった。ここでは、これら諸語がなぜ引用の助詞あるいはそれに相当するものを引用部に後置するのか。基本的な引用表現形式のほかに、バリアントとしてこれらの諸語に同じような型式が現われるのはどういう理由によるか、タイプごとに考察を加えてみたい。

まず、これらの言語において、もっとも一般的に現われる(1)のタイプをとりあげる。このタイプは日本語を母語とするものにとって、構文上、直感的に非常に安定した形式である。これの理由を考えるに当たって、まずタイプ(5)との比較をしたい。

タイプ(5)では、引用部の後に引用の助詞が来ないため、形態上、地の文と引用部の区別が不明瞭である。口頭による実際の発話では、アクセント、抑揚、ポーズやこわいろなど韻律的手段や文脈によりこの欠点はかなり補われるが、文字にされた場合は、引用を標示するためのカギ括弧が不可欠である。とくに連続した会話が交互して引用される場合にはそうである。このような引用表現の形式は、文間関係を標示する要素を持たぬ単文の連続で、後の文は、たとえ先行する引用動詞の目的語句であるという心理的論理的従属関係にはあったとしても、統辞的手段によって示されてはいない。したがって、それらの間の関係の解釈は、文脈に依存するという理由で、引用表現としては、他の表現から分離しきっていない未発達な形式であるといえる。(注12)

タイプ(5)は、印欧語の直接話法と比較してみると、後者での引用部は、あくまで主文としての地の文の一部であるのに対して、統辞的に分離したものという印象を持たざるを得ない。このタイプが直接話法として文法書などにあげられていないのは、おそらく同じ理由によるのであろう。つまりこれらの諸語には印欧語の直接話法のように地の

文に後置された会話文が、前者の述語動詞の目的語句として、組みこまれるのは制限されているといえる。この原因として考えられるのは、これらの言語はすべて基本的に述語動詞が文末に来て、目的語句など補語はそれに前置される言語であるということである。したがって、もし印欧語の直接話法のように、引用部を地の文と緊密に結合させる場合には、補語として引用動詞の前にくるのが自然である。

ところで、第二節でみたとおり、日本語では発話（心話も含めて）が引用動詞の補語となった場合、引用表現以外にも表現手段が存在する。それはその述語動詞を中心に発話全体が名詞化されて、引用動詞の目的語句として現われる場合である。これら諸語でもこのような表現が発達しており、[注13] 一般に動詞は定動詞活用から動名詞あるいは分詞にかえられ、それに対格語尾が接続される。しかし、すでに第二節において日本語の例でみたとおり、この名詞化は一般にモダリックな要素を排除し、また伝達動詞などにより内容が干渉を受けること（たとえば真実であるという前提が加わることなど）は避けがたい。

それに対し引用表現は、上のような名詞化とは異なり、述語動詞の定動詞活用をそこなわず、内容を実際の発話に近い形でとりこむことができる。これについても、日本語のトに導かれた引用部を例にとってすでに詳しく考察した。一方、引用部の統辞的機能は地の文のなかでどのように標示されているかを考えてみると先の名詞化された場合では、日本語のヲのように目的語としての格標示があった。ところが、ここでは直接引用のように発話をそのままのかたちで引用するため、いわゆる文としての体裁が整っていないものがあることのほか、引用部は名詞化表現のように名詞化された文末を持たぬため、目的語としての格標示をすることはできない。したがって引用部が地の文に組みこまれた場合、それを地の文から区別し、また引用動詞の行為の対象という統辞的機能を標示するための別の手段が必要になる。[注14] 日本語ではト、他の諸語では基本伝達動詞の副動詞形を引用の助詞として用いるのには、おそらくこのような理由があると考えられるが、実際に引用部はどのような統辞的機能をもっているのかについて考察することにする。

まず、引用表現を、独立した命題が主文に組みこまれる他の表現に対比させる意味で、次のことを考えてみたい。一般に後者の表現には、日本語やいわゆるアルタイ諸語は、印欧語などに見られる従属接続詞を用いた副文表現をもたず、そのかわりに、動詞の名詞形（分詞・動名詞）や副詞形（副動詞）をもちいる表現が発達していることは知られている［Comrie 1981a：81］。本稿で扱っている引用の助詞を構成している日本語のトや動詞の副動詞形語尾は元来このような表現に用いられることが多く、文中で副詞句を形成する（注10参照）。一方、これらが引用の助詞として引用部とともに用いられた場合も、統辞的には述語である引用動詞を修飾しており、主文のなかで副詞句を形成していることには変わりがない。それにもかかわらず引用の助詞として用いられた場合には、他の副詞句を形成する用法とは非常に異なる機能をになっていることに注意する必要がある。まず日本語のトは、つぎの例のようにトの導く引用部を副詞によって言いかえることができることから、引用の助詞として用いられた場合も機能的には同じ副詞句を形成していることがわかる。

わたしは、明日雨が降ると言った。
わたしはそう（そのように）言った。

同様のことは、他の言語についても言える。つぎに先の二文に相当するトルコ語の例を示す。

ben yarın ya ğmır ya ğacak diye söyledim.
ben öyle söyledim.

しかし、つぎのような用法は同様にトや動詞の副動詞形を用いて副詞句を形成してはいても、引用の助詞として現われた場合とは大きく異なっている。

明日雨が降ると遠足は中止です。

koş-a koş-a iskeleye vardım.「走り走り突堤まで行きついた」。

まず引用の助詞の場合は先に述べたように統辞的には副詞句を形成しながら、意味上は述語である引用動詞の目的語的補語として、引用部の内容を受けさせる。単なる副詞句として述語を修飾しているものではないことは、引用動詞は引用部とともにあってはじめて表現として完成する印象をあたえる。つまり、それは引用表現において引用部は文の構成要素として不可欠であることからもわかる。また引用部の内容はほかからの干渉は受けないが、後者の副詞句は、文の要素としては補足的でありながらも、意味的形態的に述語動詞と整合することを要求される。つぎに日本語の例で示してみるが、前者の引用表現の場合はトは何を受けてもよいが後者の副詞表現はそうではない。

彼はドウゾと言った。

＊ドウゾと遠足は中止です。

さらに引用表現の場合は引用部にモダリックな要素を許すが、副詞句の場合には許されない。

明日雨が降るだろうなと言った。

＊明日雨が降るだろうなと遠足は中止です。

また後者は過去の助動詞も許さない。

＊きのう起きたと雨が降っていた。（きのう起きると雨が降っていた）。

以上のことから、日本語の引用の助詞としてのトは副詞節をつくる終助詞のトとはまったく別の機能をもっていることがわかる。これらは双方とも文中に他の文を、統辞的には副詞句として組みこむものではあるが、引用の助詞の場合は引用部へのほかからの干渉を排除し、現実の会話として受けとめる［木村　一九八三：八〇］と同時に、引用動詞の行為の対象として標示している。すなわち引用の助詞は単なる副詞句の標示以上の機能を要求されるといえる。アルタイ諸語でも引用の助詞として用いられる要素はこのような機能を持っていると推測されるが、日本語では純粋

な文法素である助詞が用いられるのに対し、これら諸語では基本伝達動詞の副動詞形が用いられているのはなぜであろうか。この問題の解明に示唆的な表現形式がある。それは先にみたQ－v－fの形式で、そこにおいては、引用動詞として基本伝達動詞が用いられた場合には、他の動詞の場合と異なり、引用の助詞にあたるものが不要であった。これら基本伝達動詞はトの機能を兼ね備えているとみなすことができる。

（オ）niçin gelmedin? dedi.「（かれは）おまえはなぜ来なかったと言った」。

つぎにこの基本伝達動詞の副動詞形が引用の助詞に用いられる前段階としてタイプ（2）の形式を仮定できる。この形式は右のような表現の動詞が副動詞形をとることにより、そのまま副詞句として地の文に組みこまれたものである。この場合引用部を受ける基本伝達動詞は、引用動詞として「言う」の意味を保ち、その副動詞形は「～しながら」、「～して」のように地の文の述語動詞の行為に単純に付随あるいは先行する行為を示している。

（オ）niçin gelmedin? diye kalktı.［Kissling 1960：192］「おまえはなぜ来なかったと言って立ち上った」。

さて、この形式の主文の述語動詞に話ス、尋ネル、答エルのように「言う」の意味を包摂する伝達動詞が現われると、引用表現として自立性を保っていた副詞句は意味上述語動詞の行為の一部とみなすことができる。

（オ）niçin gelmedin? diye sordu.「おまえはなぜ来なかったと（言って）尋ねた」。

同じ伝達動詞でもはじめはとくに話ス、尋ネル、答エルのように実際に音声による発話の伝達行為を指すものが用いられ、かならずしも「言う」行為を含まない聞ク、書クなどは後になって可能になったのではないかと考えられる。後者の場合は引用部を受ける基本伝達動詞が「言う」という本来の意味を失い、その副動詞形は単に引用部を地の文の述語に対する補語として標示する純粋な文法要素、つまり引用の助詞にちかづいてからであろう。(注15)

この過程がさらに進んだのが、地の文の述語動詞としてもはや伝達性をもたぬ思考表現に用いた例である。具体的な伝達行為を伴わないにもかかわらず、同じ形式が用いられるのは、思考などの抽象的行為にも内的発話としてみな

しうるからであろう。引用部にみられる思考内容に、直接話法のように自然の会話にちかい形態をとるものが多いのはこの現われであろう。引用の動詞としては思ウ、信ジル、考エル、感ジルなど思考・知覚を示す動詞があげられる。

またこれに類するものに、形式ではタイプ(2)と同じでありながら、引用部と助詞の構成する副詞句は実際の伝達行為ではなく、思考内容をしめす場合がある。主文の述語動詞に付随する思考内容であるから、目的、理由、原因を示すことになり、機能的には印欧語の従属節にちかいと思える。したがって、ここで引用部を受ける助詞は、本来の具体的伝達行為から非常に離れた意味を持ってはいるが、主文に組みこまれた副詞句として、統辞的にはタイプ(2)の特徴を保持している。

以上のタイプ(1)および(2)の形式は、日本語を含め、これら諸語で統辞的にはもっとも安定しているといえる。第一に引用の助詞とみなすべきトや基本伝達動詞の副詞形は引用部に後置されるが、これはSOVを基本語順とする言語において、一般に補文標識として接続詞が補文に後置されるという普遍的法則[KUNO 1974：123-128]と合致している。第二の点として、基本語順どおり、全体の構文としては述語動詞が文末にきており、その補語として副詞句の形態をとる引用部はそれに先行している。それに対して、以下に考察するタイプ(3)および(4)はいずれも上述したものの変形であり、基本語順からみれば変則的な形式である。

タイプ(3)では、引用部と引用の助詞が地の文から抜け出て引用動詞である述語に後置されている。文を終える形態をとっている述語に引用部が後置されているため、SOVを基本語順とするこれら諸語では構文上不安定さが残ることはやむを得ない。しかし、文の理解という観点からみれば、この表現形式は引用動詞が先行することによって、引用部のはじめが、そして引用の助詞により終わりが標示され地の文にまぎれこむ可能性は減少すると考えられる。これをタイプ(1)および(5)と比較すると文理解における利点は大きいと推測される。タイプ(5)は前述したとおり引用部の終わりが標示されず、タイプ(1)では英語などと異なり、しばしば引用の始めが明確でない場合がある[三上

一九六三：三三二]。さらに引用部が非常に長い場合には、地の文の述語である引用動詞が最後まで現われないため、引用部の前にある主語やその他の補語を記憶しておく必要がある。したがって、そのことに注意を集中し心理的緊張を最後まで維持しようとして、引用部の理解に障害がおこることも考えられる。(注16)

久野[KUNO 1974]はタイプ(3)のような倒置がおこる理由について、言語心理学的な見地から示唆的な仮説を示している。久野はSOV、SVO、VSOの基本語順をもつ言語それぞれにおいて、副文にあたる包含文が主文のどの位置に現われるかを考察したが、それによれば基本語順がどれかによらず、すべての言語は包含文を、主文を構成する要素間に置く(center embedding)のを嫌い、それらの外に置く(extraposition)傾向があるという。そしてその理由を、つぎのように説明した。人間の一時的記憶能力には制限があるため center embedding は文の理解度を減少させる。原則として包含文の位置を決定するのは当該言語の基本語順である。しかし言語には理解上の困難を最小限にくいとめる手段を保有している。そのような例として、SVO言語においてみられる外置変形(extraposition)や主語上昇変形(subject raising)をあげている。たとえば、つぎのドイツ語の文において補文である包含文(「地球はまるい」)が本来なら置かれるはずの位置にはダミーの es が置かれ、それ自体は文末に移動している。

Ich denke, dass es deutlich ist, dass die Erde rund ist. [KUNO 1974：130]

「わたしは、地球はまるいのはあきらかだと思う」。

さらに興味深いのは、久野が緩い(nonrigid)SOV言語とみなしているペルシア語などに見られる目的語句の補文が文末に現われる事実である。

hama mindānand ke donyā gerd ast. [KUNO 1974：131]。

「地球がまるいこと(ke donyā gerd ast)はだれでも知っている(mindānand)」。

SOVの基本語順にしたがえば、目的語句である ke donyā gerd ast は述語動詞 mindānand の前にくるはずであ

る。

以上のことから、日本語やアルタイ諸語の引用表現に見られる引用部の文末への移動も同種の現象と考えることができよう。ただしこれらの諸語は、厳密なＳＯＶ言語であり、この基本語順の拘束力は大きい。したがって先の二つの言語では、例にあげた補文の後置が文法的に唯一選択可能なものであったのに対し、これら諸語では、タイプ(1)のように引用部が地の文の述語に前置される形式が最も文法的に安定した、一般的な形式であり、文末に引用部が現われる形式タイプ(3)にはあるていどの不安定さがあることは否定できない。(注17)

一方、この形式はタイプ(5)とは引用部に引用の助詞がつかないという点においてのみ相違しているため、直接それから発達したという可能性もありうる。実際、引用形式としては原初的と考えられるタイプ(5)は現在でも引用表現としてタイプ(3)と種々のテキストにおいて混用されており、前者が後者の出現にひとつのモデルとして影響したことも考えられる。あるいはタイプ(5)とタイプ(1)の混淆 contamination の結果とも考えられる。いずれにせよ、形式上の類似にもかかわらずこの形式はタイプ(5)から直接生じたというより、地の文と引用部という二つの文の関係を基本語順の枠内で統辞的手段により明示することを可能にしたタイプ(1)の形式を経たものとみるほうが適切であろう。(注18)

タイプ(4)①は、引用部の前の引用動詞は言いきりの形で終わるという点でタイプ(3)と似ているが、引用部のあとにも伝達動詞の言いきりの形がくる。この際、引用の助詞と同じ基本伝達動詞が単独でくる場合と、引用の助詞のあとに引用部の前にある引用動詞と同じものが繰りかえされる場合がある。基本伝達動詞は引用部を引用の助詞なしで直接受けることができるのはすでに述べたが、ここで言いきりの形をとって引用表現を終わる基本伝達動詞は引用の助詞とほとんど同様に本来の「言う」という意味はないと推測される。なぜなら、引用部の前の引用動詞がすでに伝達や思考の行為を表わしているからである。ここで、タイプ(3)が理解上の困難を減少するため、タイプ(1)の基

本語順に適った構文上の安定性を犠牲にしたことを考えにいれると、タイプ(4)①ではその安定性を保持するため、副動詞形であった引用動詞が言いきりの形をとったという推論も可能であろう。つまりSOV言語では、本来文末にくるはずのない副動詞を言いきりの形に変え、引用部とともに形式的に一つの文として完結させたとみなすことができる。しかし、これにより他方ではタイプ(3)において存在した地の文と引用部の関係がある程度弱くなるのは避けがたいことである。

タイプ(4)②では、右の(4)①で言いきりの形をとっていた引用部の前の引用動詞が、副動詞形をとる場合と分詞形や動名詞となる場合とがある。前者ではこの引用動詞は文末の基本伝達動詞に対する副詞句、後者では、引用部の修飾句あるいは同格修飾句となり、いずれの場合も全体としては、述語動詞が文末にくる一つの文を形成することになる。これはSOVの基本語順にさからってはおらず構文上は安定しているといえる。またタイプ(4)①にみられる引用部とそれに先行する部分とのあいだに生じた距離よりはずっと短いといえる。(注19)

一方この形式は、右のように全体としては一つの文を構成するが、引用部は地の文の主語と文末の述語のあいだに割り込むことになり、結果としては、タイプ(1)と同じくcenter embeddingとなっている。しかしここでは、本来の引用動詞に当たるものが、副動詞、分詞あるいは動名詞などの形をとり、引用部に先行して、それ自体で伝達・思考活動の具体的な形態を示すと同時に、つぎに引用部が現われることのいわば予告語としての機能を果たしていると考えることができる。つまりタイプ(1)では、あいまいになりがちであった地の文と引用部の境界標示をおこなっていることになり、これにより引用表現としての理解度が改善されていると見る説は多い〔神谷　一九六三：七四、岡村一九七七：二四四、胡　一九七九：二六九〕。したがってこのタイプは、先に述べた構文上の安定性と文理解における心理的条件をある程度満たす構造を持っているといえる。古典文語に多く見られるのは、このような文体としての完成度の高さのためとも思えるが、その荘重性が一方では口語文に現われることへの障害となっているといえよう。(注20)

まとめ

ＳＯＶを基本語順とする言語として日本語、アルタイ諸語、朝鮮語をとって引用表現の種々の形式を見てきた結論としてつぎのことが言えよう。基本語順にしたがって、引用部を地の文に組みこむさい、もっとも基本的な形式では、引用部は文末の引用動詞に先行する。そのさい引用部を標示し、また地の文からの干渉を妨げる要素として引用の助詞が引用部のあとに置かれる。一方、基本語順にさからって、引用部が文末に置かれる形式が見られるが、引用部を地の文のなかに置くことによって生ずる理解上の困難を軽減するためであると考えられる。また、これとならんで、引用部のあとも引用動詞の言いきりの形が繰りかえされる形式がある。これは、先のような倒置によって生じる統辞上の不安定性を回避しようとする現象であろう。したがって、これら諸語の引用表現に見られた種々の形式には、統辞構造からくる心理的負担を軽減しようとするメカニズムと同時に、それが統辞的制約を逸脱する場合には引き戻し安定性を回復しようとする傾向が関与しあっていると考えられる。

注

（注１）　ただし、考察の範囲をこれら諸語に限ったのは、基本語順がほぼ共通しているためで、日本語やこれら諸語間のいかなる系譜問題にもたちいるつもりはない。また文例は、引用形式のバリアントをできるだけ多くあつめるために、方言、文体はとくに限定せず、種々の文献によった。出典は原典に当たったもの以外は直接引用した文献を示した。ハルハ語と朝鮮語の例は一般的慣例にしたがいローマ字転写をおこなった。

（注２）　これについては［遠藤、一九八二］がくわしい。それによれば、相手に働きかける気持（伝達性）の高いものほど間接話法になりにくいとされ、低いものからつぎのように並べられる。断定・感動・疑問・推量―希望・意志―質問・加入・依頼・命令・確認―応答・挨拶・呼

びかけ。

(注3) ただし直接引用、間接引用に関する定義はそれぞれ微妙に異なっているため、提示される規則も異なっている場合が多い。これはつぎに述べるように日本語ではこれらは形式的に区別されず、中間的段階が多いということからきていると考えられる。

(注4) たとえば、中止形をとる場合、また接続助詞が付く場合もある。

彼は「……」と言い、

彼は「……」と言いながら、

(注5) 一般に引用動詞として目的語句に文をとることができる動詞は、精神活動を表現する動詞で、伝達動詞・思考動詞・知覚動詞などがある。奥津はこれらの意味成分分析による分類を試みている[奥津 一九六八：七―一〇]。

(注6) 恨ム、祈ル、泣ク、笑ウなど感情や心情と価値判断が混じった動詞には「言う」「思う」が含まれる[神谷 一九八三：六八]場合もあり、これらが引用部を受ける表現ではかならずしも言ウ、思ウが省かれているとはいえないであろう。

(注7) 三上はこのようにして、引用動詞の位置に現われた動詞をみかけの伝達動詞[三上 一九六三：一四三]、遠藤は代用動詞と呼ぶ[遠藤 一九八二：九〇]。

(注8) これらの事象を総括して「修飾語の被修飾語に先行する原則」(rectum vor regens)ということが多い。ツングース語やその他の言語にもしばしばこの原則から逸脱する語順が見られるが[MENGES 1968a：40]、文末に動詞を置く傾向は強い[COMRIE 1981a：79]。

(注9) 例 Nermin bize uzun mektup yazdı. Ankara'ya gitmek niyetindeymiş, fakat bu plandan vazgeçmiş.「ネルミンはわれわれに長い手紙を書いた。アンカラに行くつもりだったそうだが、やめたそうだ。」

しかし、この表現は「……だそうだ」という伝聞のモードを加えるだけで、引用をおこなう話者は明示されず、本来の引用表現とは異なっている。

(注10) ここに用いられる基本伝達動詞と副動詞形はモンゴル語とチュルク系の言語では、時代や方言によって異なる場合がある。古代チュルク語は ti·p、オスマン語は di·ye、モンゴル語文語は keme·n、ハルハ語は ge·dʒ を一般に用いる。つぎにこれら副動詞の一般的な用法をいくつかあげる。

(オ) güle güle çıktı 喜び喜び出て行った。

(ハ) tsas ordʒ xüiteŋ bolloo 雪が降り寒くなった。

(満) bithe alime gaimbi 手紙を受け取る。

(朝) sinmun'ur irggo issda 新聞を読んでいる。

（注11）　これ以外にも文語では-ju ／ü や -ged ／ -ɣad などの副動詞語尾が用いられる場合がある。

（注12）　印欧語においても、初期の段階では、このような文間の関係は統辞的手段によって標示されないことがあったが、現在も直接話法はこれに当たるとされている［パウル　一九七六上：二五八―二五九］。

（注13）　先に例をあげた、日本語のコトやノが受ける名詞化した表現に相当するものは、これらの言語においてもさかんに用いられる。

（オ）Nüzhet ile nişanlandığımı duydunuz mı?「わたしがニュズヘトと婚約したのを聞いたかい」［Kissling　1960：180］。

（注14）　たとえば、つぎのように引用の助詞のない場合、述語が二つ連続することになり、理解は困難になることが容易に推測できる。

＊わたしは（彼が今日来る）聞いた。

（注15）　動詞が文法素になる事例は、これら諸語のほかにも多くの言語において見られる［Mallison and Blake　1981：385-6］。またこれをOV言語と後置詞・VO言語と前置詞のように adposition と head の相対的位置が、動詞と目的語のそれと普遍的な相関関係にあることの歴史的裏付けにしようとする試みがある［Vennemann　1973：31］。

（注16）　たとえば、つぎのように引用部にもう一つの引用部が含まれる場合を考えると、連続する三つの主語と述語のどれとどれが結びつくかは容易に記憶しがたい。それに対し、後の文は日本語の構文からは不自然ではあるが、理解度ではすぐれている。

＊私は（彼が（少年が来た）と言った）と聞いた。

＊私は聞いた（彼が言ったと（少年が来たと））。

（注17）　チュルク語には上にあげたペルシア語の従属接続詞 ke を借用し、従属節として主節に後置する表現があるが、これも基本語順にさからっているため定着しきっているとはいえない。

Herkes bilir ki dünya yuvarlaktır.「だれでもしっている、地球が円いと」。

この ki は後続の節頭にではなく前の節の最後に属していると解釈されることが多い［Menges　1968b：185, Comrie　1981b：196］が、この場合、後続の節が主節になり基本語順にかなう。これも言語の統辞的安定をもとめる傾向の現われと考えることができよう。

（注18）　引用部を文末に置くタイプ（3）は、つぎに検討する（4）①、②変形ともみられるが、タイプ（1）から派生した可能性の傍証として、つぎのことをあげることができる。引用部に先行する引用動詞の前にはコウやコノヨウニなどが現われることがある。これらは引用部の本来の位置を標示し、また意味的に地の文につなぎおくためのダミーとしての承前詞とみなすことができる。先のドイツ語の倒置においてもみられたように、このような例は他の言語にも存在する。またここで注目すべきことに、承前詞として現われる語は主に副詞であることで、おなじく後方照応のコノコトヲやコレヲなどは用いられない。

＊彼はこれを言った。「明日雨が降るだろう」と。

これは、引用部が単なる名詞句として組みこまれてないことを示しているといえる。さらに先に述べた名詞化表現は引用表現とは異なることにも関係があろう。また木村は副詞的承前詞に類するものとしてコンナコトヲが引用表現に用いられるのはコンナにより比較的名詞性が少なくなっているためであるとしている［木村　一九八三：八二］。

（注19）　ところでタイプ（4）にみられたような、倒置によって生じた構文上の不安定性の回復が変化の原因と思われる現象はほかにもみられる。たとえば大坪［一九八三：二六―二七］は平安時代の和文や院政時代の和漢混淆文には連用修飾語と述語の倒置がみられるが、そのうちには、倒置くずれといわれるものが存在するとしている。これはつぎの例に見られるように、述語に後置されている連体修飾語の末尾の部分には本来あるべき格助詞ヲあるいはトのかわりに婉曲の助動詞の終止形が来ている。

　われ、朝ごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ、子となり給ふべき人なめり。（『竹取物語』）

　大坪は、この倒置くずれを正常な位置に従おうとする潜在意識によるとしているが、構文上の安定性を求める意識と言いかえることもできよう。

（注20）　タイプ（4）から引用部の後が欠けているとみなされる形式が日本語や満洲語などの例にあったが、理由はこういうところにあるのかもしれない。ただし引用部の前の引用動詞が名詞化している場合には、日本語からも推察できるように、引用部は名詞化し主語である引用動詞の述語補文となっているとみなすことも可能であろう。

　彼が言うには、「明日は雨だ」。
　　主語　　述語

　満洲語には、この形式で引用動詞に副動詞語尾 -me がつく場合が多いが、津曲はこの場合の -me は名詞派生語尾として同種の表現とみなしている［津曲　一九八一：一五八］。

引用文献

天野政千代　一九八三「英語の主語・助動詞転倒と主語後置」『言語』八月号、一二四―一三五頁。
石原六三・青山秀夫　一九六三『朝鮮語四週間』大学書林。
入谷敏男　一九八一『話しことば―その仕組と展開』中公新書。
上野田鶴子　一九八二「日本語―英語」『講座 日本語学』第一一巻、明治書院、一二二―一四一頁。
遠藤裕子　一九八二「日本語の話法」『言語』三月号、八六―九四頁。
大坪併治　一九八三「文章史をどうとらえるか」『日本語学』一一月号、二一―二九頁。

岡村和江　一九七七「仮名文」『岩波講座 日本語』第一〇巻、岩波書店、二二五―二五四頁。
奥津敬一郎　一九六八「引用構造と間接転形」『言語研究』五六号、一―二二頁。
鎌田　修　一九八三「日本語の間接話法」『言語』九月号、一〇八―一一七頁。
神谷かおる　一九八三「引用形式からみた物語文章史」『日本語学』二月号、六六―七五頁。
菅野裕臣　一九八二「ヴォイス 朝鮮語」『講座 日本語学』第一〇巻、明治書院、二五六―二七九頁。
木村英樹　一九八三「『こんな』と『この』の文脈照応について」『日本語学』十一月号、七一―八三頁。
『現代語の助詞・助動詞』　一九五一、国立国語研究所報告三。
河野六郎　一九五五「朝鮮語」『世界言語概説』（市河三喜・服部四郎共編）研究社、三五九―四三九頁。
国語学会編　一九八〇『国語学大辞典』東京堂出版。
胡増益　一九七九「説 sembi―満語釈詞札記」『民族語文』第四期、二六八―二七三頁。
津曲敏郎　一九八一「満州語の動詞語尾 -me について」『北方文化研究』一四、一四九―一七一頁。
ヘルマン・パウル（福本喜之助訳）一九七六『言語史原理』（上）、講談社。
『満文老檔太祖 Ⅰ』一九五五、東洋文庫叢刊第一二、東洋文庫。
三上　章　一九六三『日本語の講文』くろしお出版。
　一九七二『現代語法序説』くろしお出版。
南不二男　一九七六「意味の研究について」『言語』四月号、二二―二八頁。
山本謙吾　一九五五「満洲語文語形態論」『世界言語概説』（市河三喜・服部四郎共編）、研究社、四九一―五三六頁。
BENZING, Johannes　1955 *Die Tungusischen Sprachen*. Franz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden.
COMRIE, Bernard　1981a *The Languages of the Soviet Union*. Cambridge University Press, Cambridge.
――――1981b *Language Universals and Language Typology*. Basil Blackwell,. Oxford
von GABAIN, A., 1974 *Alttürkische Grammatik*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
――――1945 *Özbekische Grammatik*. Otto Harrassowitz. Leipzig und Wien
GREENBERG Joseph H. 1963 Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements. In Greenberg, J. (ed.) *Universals of Language*. The M. I. T. Press, Cambridge, pp. 73-114.
GRONBECH. K & KRÜGER. J. R.　1955 *An Introduction to Classical (Literary) Mongolian*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

HAENISCH, Erich 1961 *Mandschu-Grammatik.* Veb Verlag Enzyklopädie, Leipzig.

HALLIDAY, M. A. K. 1970 Language Structure and Language Function. In John Lyons (ed.) *New Horizons in Linguistics.* Penguin Books, Harmondsworth, pp. 140-165.

KISSLING, Hans Joahim 1960 *Osmanisch-türkische Grammatik.* Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

KUNO, Susumu 1973 *The Structure of Japanese Language.* M. I. T. Press, Cambridge.

———1974 The Position of Relative Clauses and Conjunctions. *Linguistic Inquiry* 5(1), pp. 117-136.

MALLISON, Graham and BLAKE, Barry J. 1981 *Language Typology.* North-Holland Publishing Company, Amsterdam.

MENGES, Karl H. 1968a Die tungusischen Sprachen. In W. Fuchs et al. *Tungusologie.* E. J. Brill, Leiden／Köln, pp. 21-256.

———1968b *The Turkic Languages and Peoples.* Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

NAKAU, Minoru 1972 *Sentential Complementation in Japanese.* Kaitakusha, Tokyo.

POPPE, Nicholaus 1974 *Grammar of Written Mongolian.* Otto Harrassowitz, Wiesbaden.

RAMSTEDT, G. J. 1939 *A Korean Grammar.* Suomalais-ugrilaisen Seuran Toimituksia 82. Suomalais-ugrilainen Seura, Helsinki.

———1973 *Nordmongolische Volksdichtung I.* Suomalais-ugrilaisen Seuran Toimituksia 153. Suomalais-ugrilainen Seura, Helsinki.

RÜHL, Ph. 1970 *Türkische Sprachlehre.* Julius Groos Verlag, Heidelberg.

STREET, John Charles. 1957 *The Language of the Secret History of the Mongols.* American Oriental Society, New Haven.

VENNEMANN Genannt Niefeld, Theo. 1973 Explanation In Syntax. in John Kimball (ed.) *Syntax and Semantics. Vol. II.* Taishukan, Tokyo, pp. 1-50.

VIETZE, Hans-Peter. 1969 *Lehrebuch der Mongolischen Sprache.* Veb Verlag Enzyklopädie, Leipzig.